



ESRI Research Note No.21

第1回 生活の質に関する調査結果 (検討用資料追加)

桑原 進

November 2012



内閣府経済社会総合研究所
Economic and Social Research Institute
Cabinet Office
Tokyo, Japan

ESRI Research Note は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません。今後の修正が予定されるものであるため、当研究所及び著者からの事前の許可なく引用・転載することを禁止いたします。

ESRI リサーチ・ノート・シリーズは、内閣府経済社会総合研究所内の議論の一端を公開するために取りまとめられた資料であり、学界、研究機関等の関係する方々から幅広くコメントを頂き、今後の研究に役立てることを意図して発表しております。

資料は、すべて研究者個人の責任で執筆されており、内閣府経済社会総合研究所の見解を示すものではありません。

なお、今後の修正が予定されるものであり、当研究所及び著者からの事前の許可なく論文を引用・転載することを禁止いたします。

(連絡先) 総務部総務課 03-3581-0919 (直通)

第1回 生活の質に関する調査結果（検討用資料追加）

平成 24 年 11 月
幸福度研究ユニット
桑原進

この調査結果は、本年 4 月 27 日に第 6 回幸福度に関する研究会に報告された第 1 回生活の質に関する調査結果（検討用資料）の追加資料として取りまとめたものである。具体的には、1. 自然についての考え方、2. 周りの環境、3. 生活時間の評価と満足度、4. 経済的理由で行うことができないことの 4 点について調査結果を紹介する¹。

1. 自然についての考え方

「自然は大切な存在である」など自然についての考えを聞いたところ、「自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどを持つことがある」、「自然は大切な存在である」、「自然の力に脅威、恐れを感じることもある」、「自然の力によって生かされていると思うことがある」という項目に対しては、過半数の人が同意した。一方、「何か大きな力に自分の運命は動かされていると感じることがある。」という項目に同意する人は、約 31%（強く同意 7.4%+やや同意 23.8%）であり、同意しない人の方が約 33%（やや同意しない 11.7%+全く同意しない 21.2%）とやや多かった。

表 1-1 自然についての考えの回答者の分布

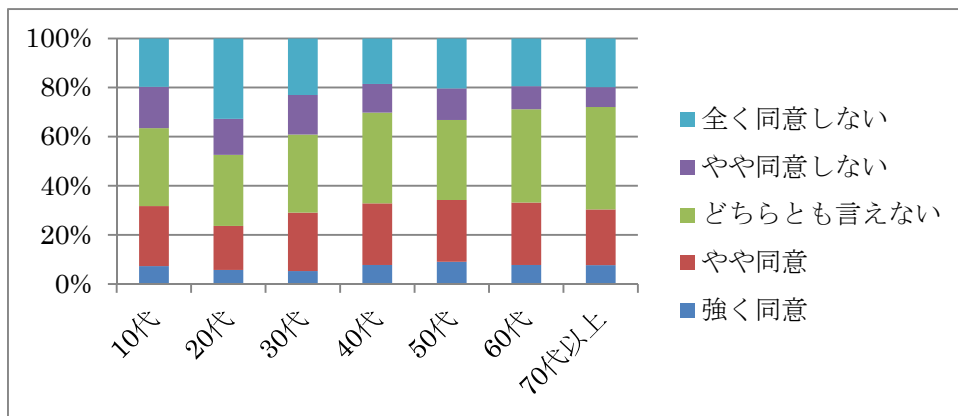
	(%)				
	強く同意	やや同意	どちらとも 言えない	やや同意 しない	全く同意 しない
何か大きな力に自分の運命は動かされているように感じることがある	7.4	23.8	35.8	11.7	21.2
自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどをもつことがある	21.2	42.5	24.9	5.8	5.7
自然は大切な存在である	63.7	27.5	7.1	0.8	0.9
自然の力に脅威、恐れを感じることもある	45.4	33.1	14.9	3.4	3.2
自然の力によって生かされていると思うことがある	33.9	39.2	20.6	3.4	3.0

¹本稿の作成にあたり、内閣府経済社会総合研究所の E S R I セミナーでの報告において、小島愛之助次長をはじめ参加者の皆様から貴重なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。なお、本稿で示した見解はすべて筆者個人の見解であり、所属機関の見解を示すものではありません。

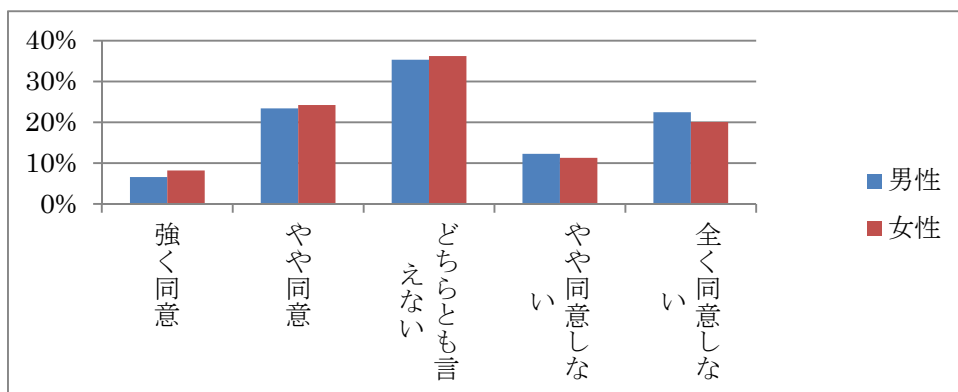
次に、年代別にみると、「何か大きな力に自分の運命は動かされているように感じることもある」については、20代で全く同意しないという回答が多い（図 1-1）。男女別には、女性の方が相対的により同意している。

図 1-1 何かの大きな力に自分の運命は動かされているように感じることもある。

(1) 年代別

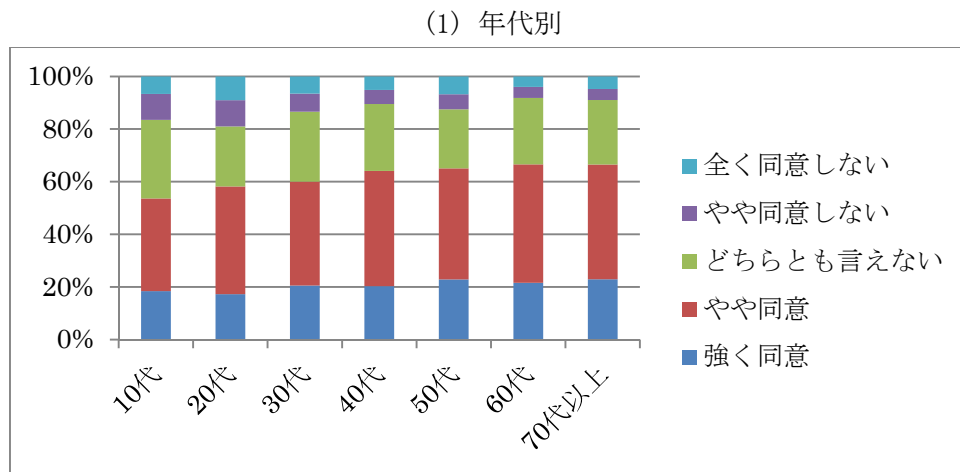


(2) 性別

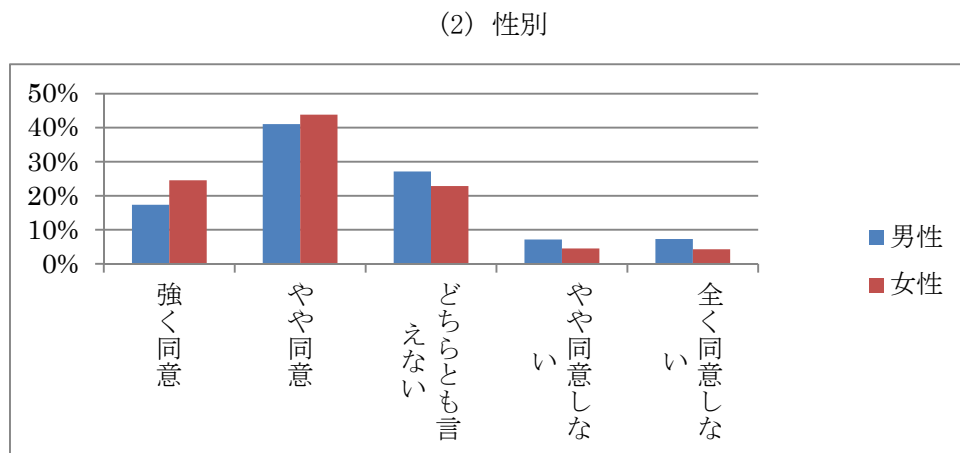


「自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどを持つことがある」という問いに対し
ては、年齢が上がるほど、同意するとする回答が増えている。

図 1-2 自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどをもつことがある



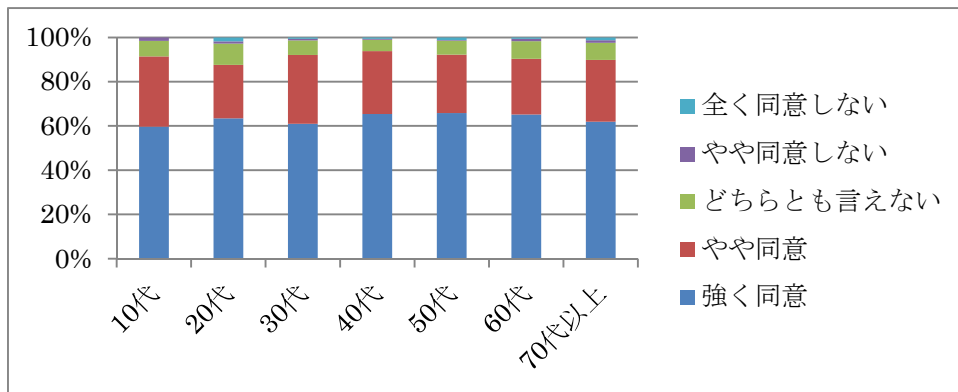
男女別には、女性で同意するとする回答が多い。



「自然は大切な存在である」という問いには、年代の影響は他の項目と比べてやや弱く、はっきりとした関係は見えないが、分散分析を行うと、年代別の違い（主効果）は有意であった。

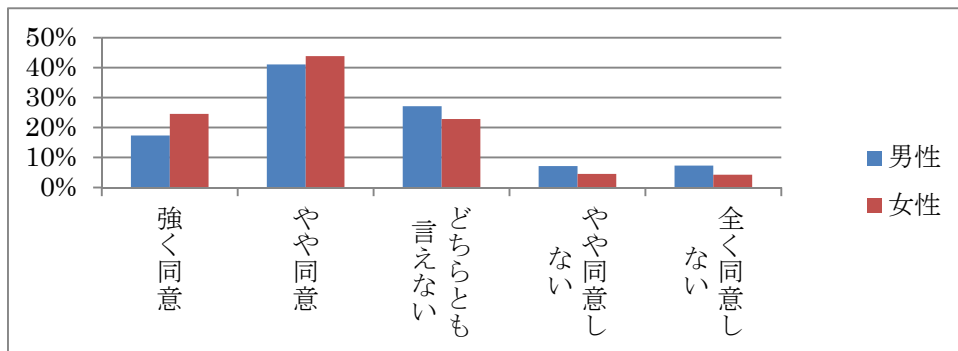
図 1-3 自然は大切な存在である

(1) 年代別



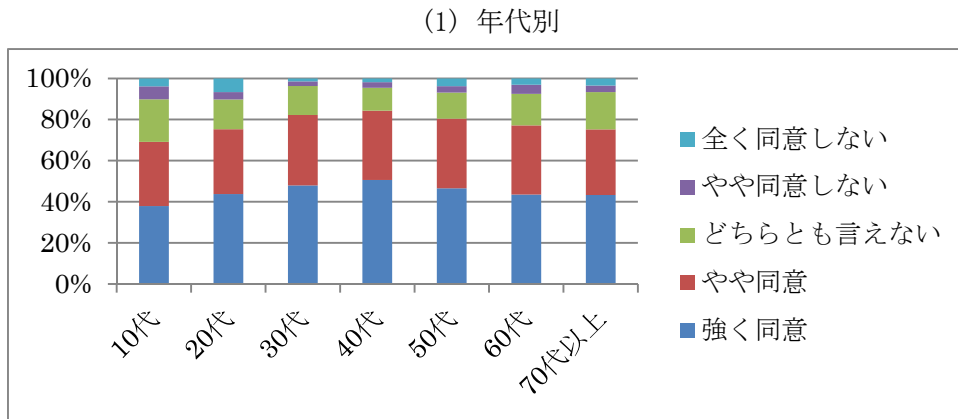
性別には、女性で同意するという回答が多かった。

(2) 性別

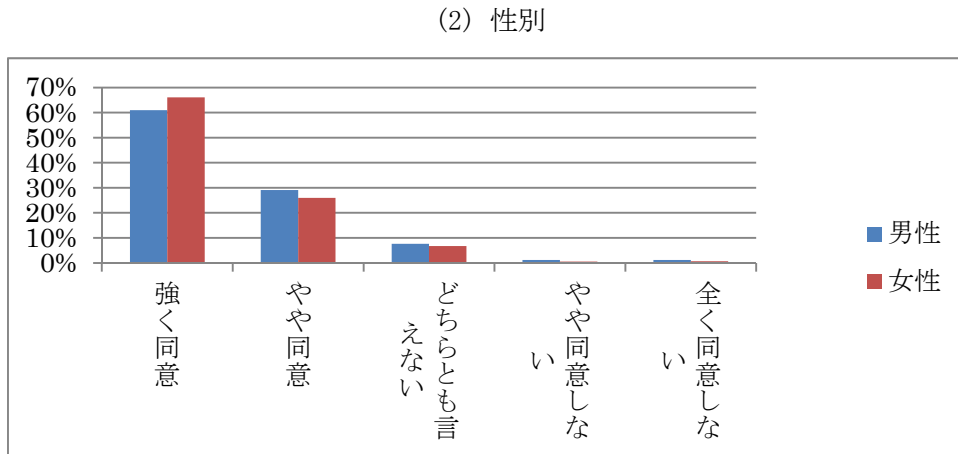


「自然の力に脅威、恐れを感じることもある」という問いには、年代別には、40代で感じると回答する割合が高く、年齢との関係は、逆U字型となっていた。

図 1-4 自然の力に脅威、恐れを感じることもある



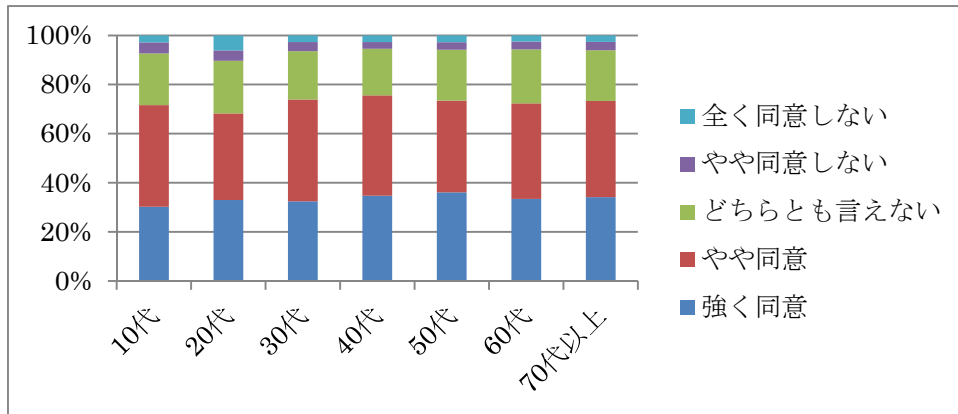
性別には、女性で強く同意するという回答が多い。



「自然の力によって生かされていると思うことがある」という問いには、40代、50代で同意するという回答が多かった。

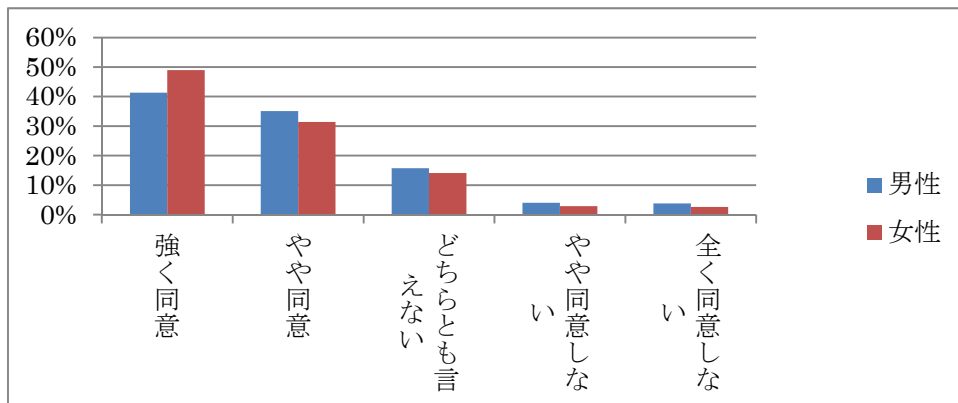
図 1-5 自然の力によって生かされていると思うことがある

(1) 年代別



性別には、女性で強く同意するという回答が多かった。

(2) 性別



被災地と被災地以外での自然への考え方の回答の違いがあるか見たところ（図 1-6～図 1-10）、「何かの大きな力に自分の運命は動かされているように感じることもある」、「自然は大切な存在である」、「自然の力によって生かされていると思うことがある」については、被災地と被災地以外で明確な違いは存在しないように見える（適合度検定、回答を指数化した平均値への t 検定とも有意ではなかった）。

一方、「自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどをもつことがある」については、被災地において「強く同意する」が少なく（t 検定では有意）、「自然の力に脅威、恐れを感じることもある」については、被災地において「強く同意する」と回答した人が多いことが分かる（適合度検定、t 検定とも有意水準 5% で有意）。

図 1-6 何かの大きな力に自分の運命は動かされているように感じることもある。

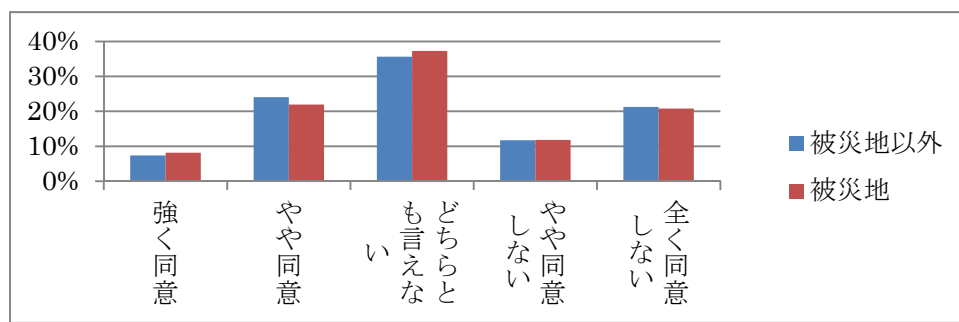


図 1-7 自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどをもつことがある

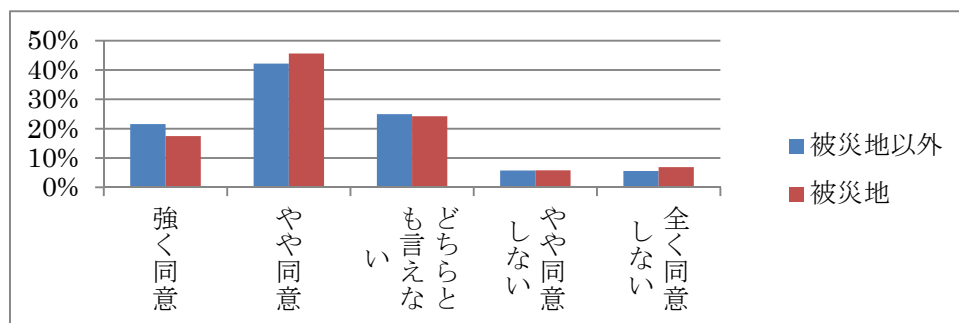


図 1-8 自然は大切な存在である

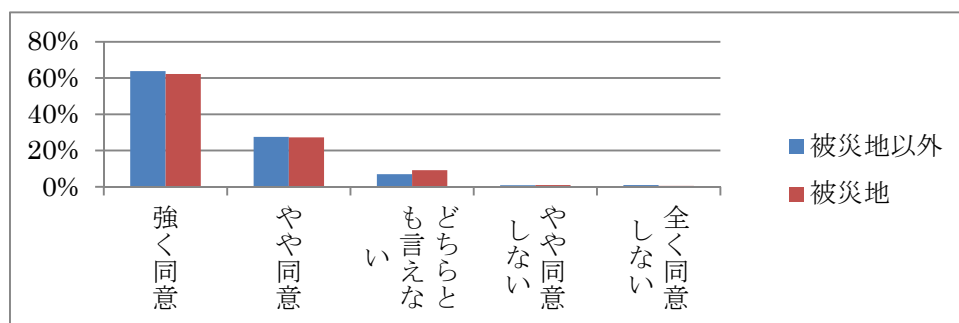


図 1-9 自然の力に脅威、恐れを感じることもある

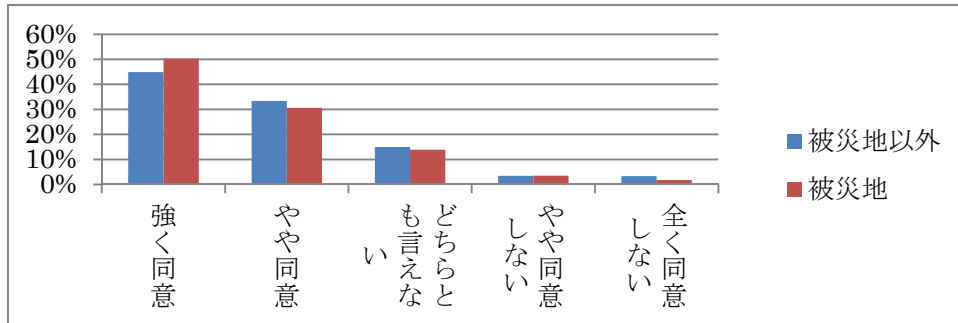
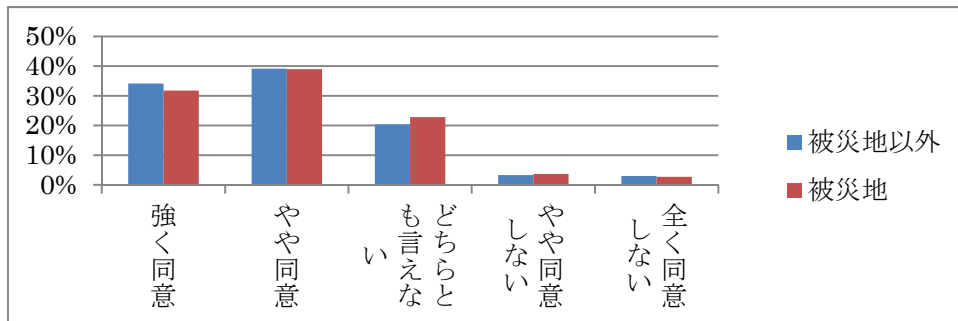


図 1-10 自然の力によって生かされていると思うことがある



自然とのかかわりへの質問への回答と現在の幸福感の関係をみると、全ての問で、強く同意する場合、幸福感が高いが（指数化した回答同士の相関係数は1%水準で有意）、「感謝」、「大切」、「生かされている」の質問項目で相関関係が相対的に強い（表 1-2）。

表 1-2 自然とのかかわりへの回答ごとの現在の平均幸福感

	現在の幸福感					相関係数
	強く同意	やや同意	どちらとも言えない	やや同意しない	全く同意しない	
何か大きな力に自分の運命は動かされているように感じることがある	7.0	6.7	6.5	6.8	6.6	0.04
自然などの人間を超えた力に感謝の気持ちなどをもつことがある	7.2	6.7	6.3	6.1	5.9	0.18
自然は大切な存在である	6.9	6.4	5.9	6.0	5.6	0.15
自然の力に脅威、恐れを感じることもある	6.8	6.6	6.4	6.6	6.4	0.05
自然の力によって生かされていると思うことがある	6.9	6.7	6.4	6.2	5.6	0.14

2. 周りの環境

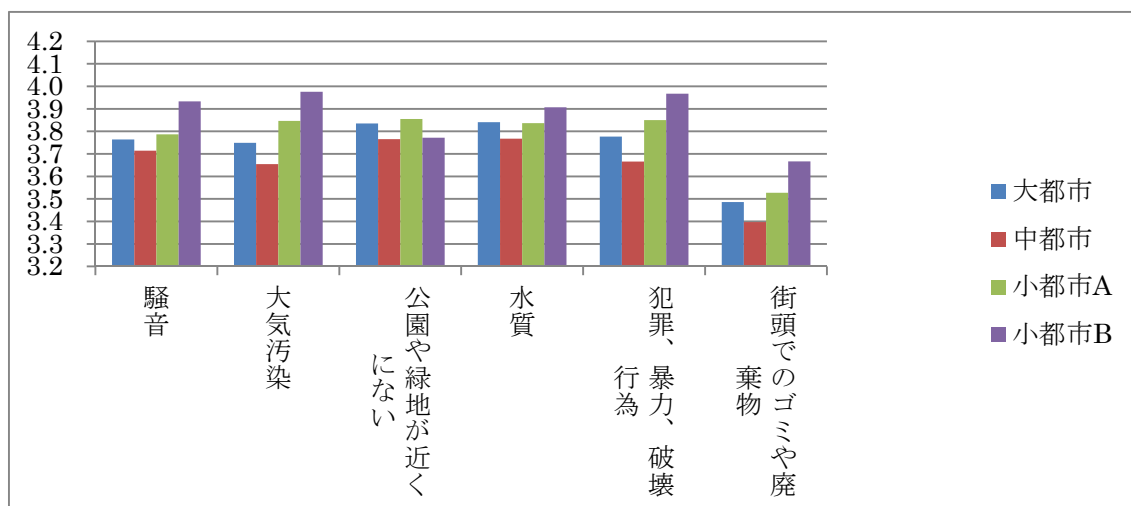
ご近所など住んでいる周りの環境への満足度を聞いたところ、結果は以下の表2の通り。全ての項目において不満はないと回答した人が過半数を超えているものの、街頭でのゴミや廃棄物については、2割近い人が不満を訴えている。大都市、中都市、小都市A、小都市B・町村²という都市規模別に周りの環境への満足度を見るために、満足度を「非常に不満」を1、「どちらかという不満」を2、「どちらでもない」を3、「どちらかといえば不満はない」を4、「まったく不満はない」を5として指数化し、都市規模と満足度の関係を見たところ、小都市B・町村において満足度が高い一方、満足度が低いのは、全ての項目で中都市であった。

表2 住んでいる周りの環境の満足度

(%)

	非常に不満	どちらかといえば不満	どちらでもない	どちらかといえば不満はない	全く不満はない	不満	不満はない
騒音	3.6	12.0	20.7	29.8	33.9	15.6	63.8
大気汚染	3.0	8.9	25.8	30.5	31.8	11.9	62.3
公園や緑地が近くにない	3.2	9.5	23.2	30.1	34.0	12.7	64.1
水質	2.3	7.1	27.2	31.7	31.8	9.3	63.5
犯罪、暴力、破壊行為	2.3	7.3	27.5	33.3	29.6	9.6	62.9
街頭でのゴミや廃棄物	4.8	15.0	26.7	31.7	21.8	19.8	53.5

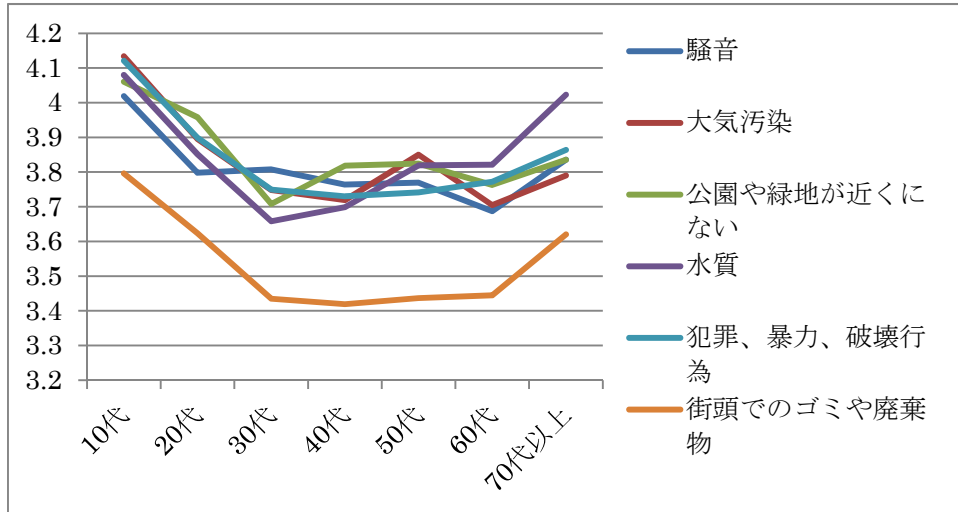
図2-1 都市規模別の周りの環境への満足度



² 本調査では家計調査にならい、大都市：東京都区部、政令指定都市、県庁所在地、中都市：人口15万以上100万未満、小都市A：人口5万以上15万未満、小都市B・町村：人口5万未満及び町村以下という都市規模区分を用いている。

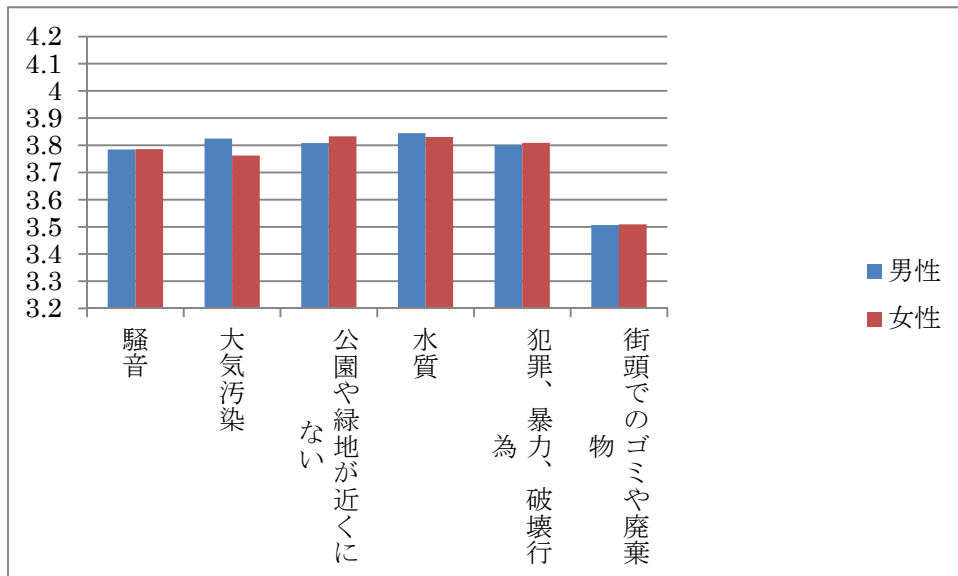
年齢別に指数化した満足度をみると、おおむね U 字型となっているが、公園や緑地への満足度は 30 代が最も低く、騒音は 60 代が最も低いなど、問題により、特に影響を受けている年代が異なっていると考えられる。

図 2-2 年齢別の周りの環境への満足度



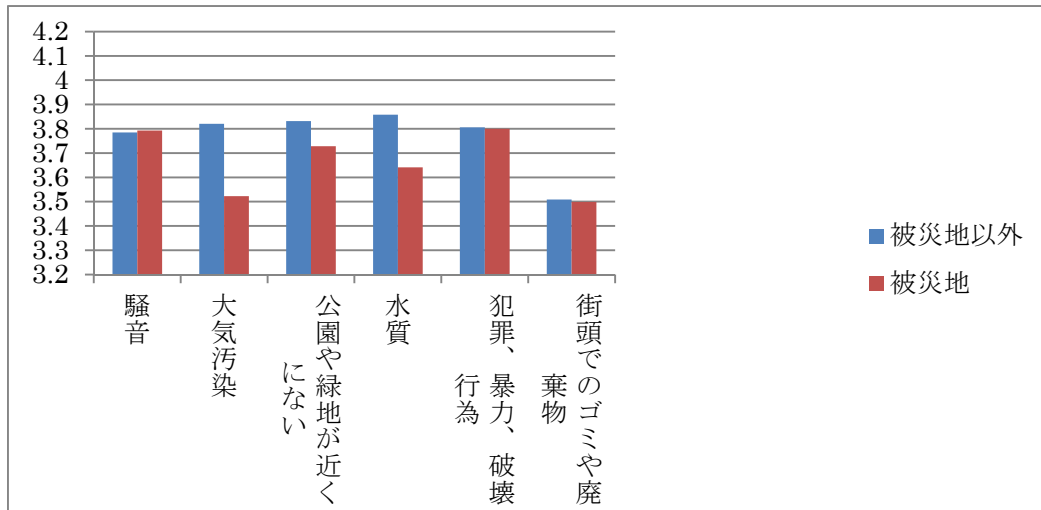
性別には、大気汚染でのみ、有意な差が見られた（指数への t 検定、5%水準）。

図 2-3 性別の周りの環境への満足度



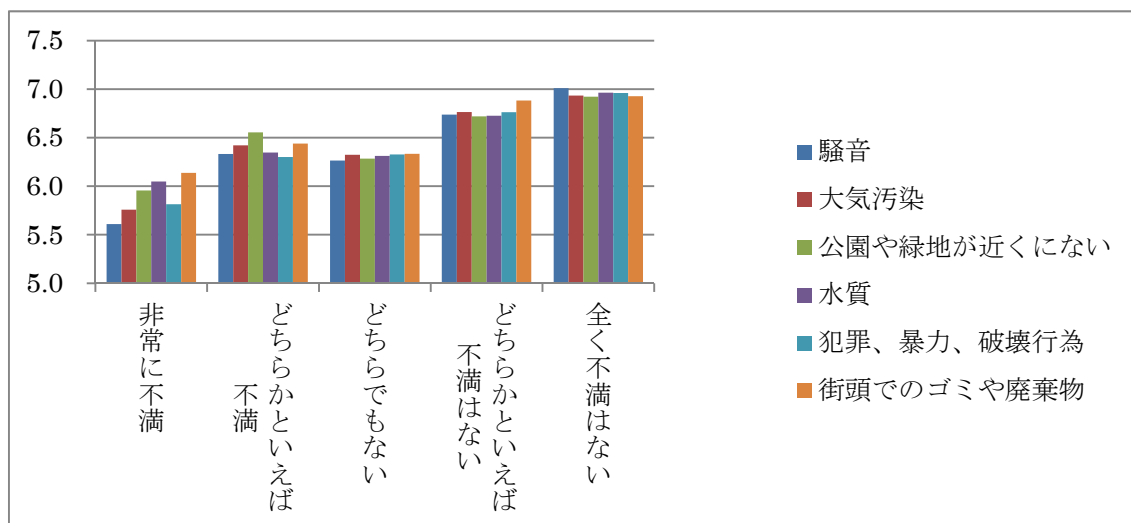
周りの環境について、被災地以外と被災地で満足度に違いが出るか、みたところ、大気汚染、水質については、被災地で満足度が低く、適合度検定で、1%レベルで有意な違いがあった。

図 2-4 被災地と被災地以外における周りの環境の満足の違い



次に、周りの環境と現在の幸福感についてみたところ（図 2-5）、非常に不満と回答した人の現在の幸福感は低く、逆に全く不満はないと回答した人の幸福感は高く、相関関係が見て取れる。特に騒音、大気汚染及び犯罪・暴力・破壊行為は幸福感に大きく影響している（満足度の指数と現在の幸福感との相関係数はそれぞれ、騒音：0.1655、大気汚染：0.133、公園や緑地が近くにない：0.1158、水質：0.1306、犯罪、暴力、破壊行為：0.1383、街頭でのゴミや廃棄物：0.1201、全て1%水準で有意）。

図 2-5 周りの環境の満足度と現在の幸福



3. 時間配分の評価と満足度

平日における一日の時間配分についての評価を聞いたところ、「長い」という回答が「短い」という回答と比較し多かったのは就業時間であり、逆に「短い」という回答が「長い」より多かったのは学習時間、睡眠時間、家事時間、看護・介護・育児時間、その他自由時間であった。

表 3-1 生活時間の評価

(%)

	長い	ちょうど良い	短い	該当しない
就業時間	20.0	37.4	6.3	36.4
学習時間	1.8	12.0	19.6	66.7
睡眠時間	5.9	58.1	34.9	1.1
通勤・通学時間	10.4	35.0	13.2	41.5
家事時間	6.5	44.2	26.1	23.2
看護・介護・育児時間	3.9	12.8	9.1	74.2
その他自由時間	11.8	50.9	32.0	5.3

次に時間配分への満足度を聞いたところ、満足しているという回答が多かったのは、睡眠時間、生活時間全般、その他自由時間であった。但し、睡眠時間について、不満という回答も多かった（「どちらかという不満」＋「非常に不満」＝約26%）。

表 3-2 時間配分満足度

(%)

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない
生活時間全般	3.1	14.5	32.8	40.6	7.4	1.6
就業時間	4.6	13.0	20.1	21.8	3.6	36.9
学習時間	1.7	7.6	14.9	7.8	1.5	66.4
睡眠時間	6.0	20.4	20.5	40.4	11.7	1.1
通勤・通学時間	2.4	7.3	14.9	22.5	12.0	40.9
家事時間	1.7	8.4	34.3	26.9	5.3	23.4
看護・介護・育児時間	1.2	4.3	13.8	6.9	0.9	73.0
その他自由時間	5.4	16.2	25.6	35.6	10.8	6.5

時間の評価と満足度は項目により方向性が異なる。また、必ずしも、ちょうど良いという評価で最も時間利用の満足度が高いわけではない。このため、項目ごとの時間の評価と満足度の関係を見ると、就業時間では長いと不満とする回答が多いが、短くても不満とする回答は多く、「ちょうど良い」という回答で満足度が高かった。

表 3-3 就業時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	20%	45%	24%	8%	1%	1%	100%
ちょうど良い	0%	6%	32%	50%	8%	4%	100%
短い	7%	28%	33%	20%	6%	7%	100%
該当しない	0%	0%	3%	1%	1%	95%	100%

学習時間では、「長い」と評価する人に「満足」と回答する人の割合が42%と、「ちょうど良い」と回答する人の45%とほとんど変わらなかった。但し、「長い」ことを「不満」に思っている人も25%と少なくない。

表 3-4 学習時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	5%	19%	30%	27%	15%	4%	100%
ちょうど良い	1%	4%	40%	39%	6%	11%	100%
短い	7%	32%	38%	10%	2%	10%	100%
該当しない	0%	1%	3%	1%	0%	95%	100%

睡眠時間では、「長い」と回答した人の81%が「満足」と回答しており、「ちょうど良い」という回答の76%より満足と回答する人が多い。逆に「短い」と回答した人の67%は「不満」と回答していた。

表 3-5 睡眠時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	3%	5%	10%	32%	49%	1%	100%
ちょうど良い	0%	4%	20%	61%	14%	1%	100%
短い	16%	52%	23%	8%	1%	0%	100%
該当しない	6%	1%	20%	14%	13%	46%	100%

通勤・通学時間については、「長い」と回答していた人の、約8割が「不満」と回答していた。

表 3-6 通勤・通学時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	20%	57%	18%	3%	1%	1%	100%
ちょうど良い	0%	3%	31%	49%	15%	2%	100%
短い	1%	2%	11%	34%	50%	2%	100%
該当しない	0%	0%	2%	1%	0%	96%	100%

家事時間については、「長い」と回答した人の半数以上が「不満」と回答していた一方、「短い」と回答した人の回答は、18%が「不満」、25%が「満足」、51%が「どちらとも言えない」となっており、満足度の方向性は、はっきりしない。

表 3-7 家事時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	10%	43%	33%	12%	1%	1%	100%
ちょうど良い	0%	3%	39%	47%	7%	3%	100%
短い	3%	15%	51%	18%	7%	6%	100%
該当しない	0%	1%	7%	2%	1%	89%	100%

看護、介護、育児時間も就業時間同様、長くても短くても不満と回答する人が多かった。

表 3-8 看護・介護・育児時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	16%	36%	28%	15%	2%	3%	100%
ちょうど良い	0%	4%	51%	37%	3%	4%	100%
短い	5%	23%	49%	14%	3%	6%	100%
該当しない	0%	0%	2%	0%	0%	97%	100%

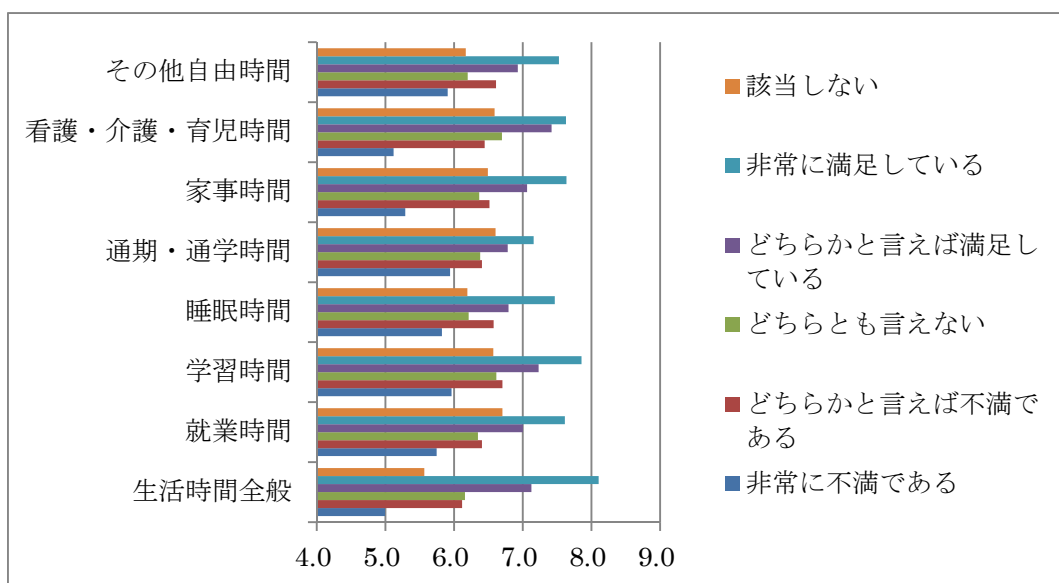
その他の自由時間については、「長い」と評価する人の7割が「満足」と回答し、「短い」と回答する人の6割が「不満」と回答していた。

表 3-9 その他自由時間

	非常に不満である	どちらかと言えば不満である	どちらとも言えない	どちらかと言えば満足している	非常に満足している	該当しない	合計
長い	2%	5%	16%	38%	35%	4%	100%
ちょうど良い	0%	2%	27%	54%	12%	4%	100%
短い	15%	45%	28%	9%	1%	2%	100%
該当しない	2%	2%	16%	11%	4%	64%	100%

生活時間配分の満足度と現在の幸福感の関係を見ると、全ての項目で時間の満足度は幸福感と結びついているが、特に生活時間全般について、非常に不満である場合には現在の幸福感が5程度と低く、逆に非常に満足している場合には8を超えており、満足度と現在の幸福感は強く相関していると思われる。ちなみに満足度を「非常に不満」を1、「どちらかという不満」を2、「どちらでもない」を3、「どちらかといえば不満はない」を4、「まったく不満はない」を5として指数化し、現在の幸福感との相関係数を計算すると、生活時間全般：0.3135、就業時間：0.1989、学習時間：0.1605、睡眠時間：0.1617、通期・通学時間：0.1526、家事時間：0.1974、看護・介護・育児時間：0.2322、その他自由時間：0.1797 となっており、それぞれ1%水準で有意である。

図 3-1 生活時間満足度と現在の幸福感



男女のライフスタイルの違いを反映し、男女差が大きいと思われるところ、男女別に時間利用の評価みると、就業時間では、該当する、しないに大きな差が出たものの、該当する人の中では男女に大きな違いはないようである。

表 3-10 就業時間

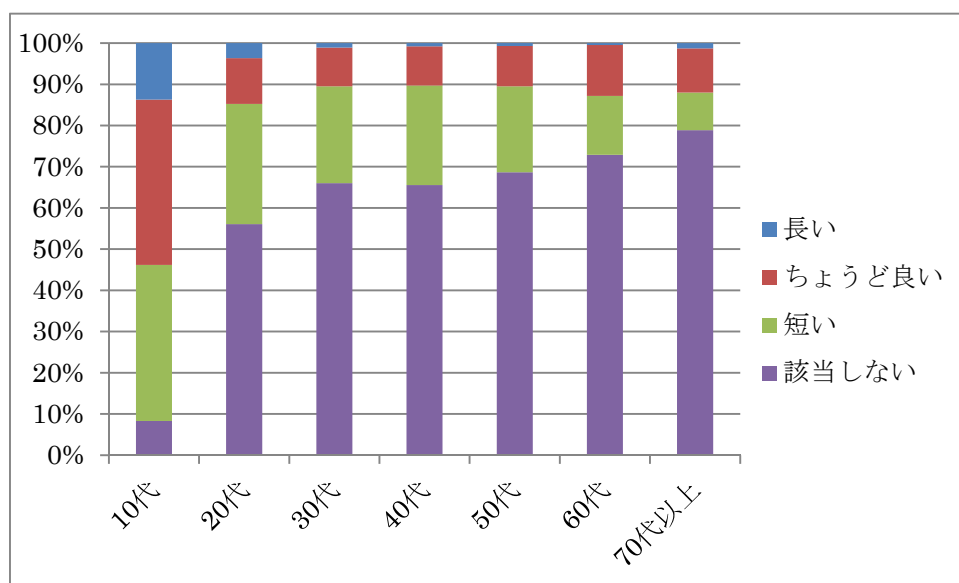
	男性	女性
長い	24%	16%
ちょうど良い	41%	34%
短い	7%	6%
該当しない	28%	44%

学習時間では多くの人が「該当しない」と回答したものの、該当すると考えた人の多くが男女にかかわらず「短い」と評価している。年齢別にみると、20代以降は過半数の人が該当しないと回答しているが、60代までは20%以上の人が「短い」と回答している。表 3-4にあるように学習時間の短さに不満を持つ人が多いことから、少なくない割合で学習時間を求めている人が存在すると考えられる。

表 3-11 学習時間

	男性	女性
長い	2%	2%
ちょうど良い	14%	10%
短い	23%	17%
該当しない	61%	72%

図 3-2 年齢別学習時間の評価



睡眠時間の評価にも男女差は見当たらない。過半数の人が「ちょうど良い」と回答しているが、3割以上の人が男女とも「短い」と評価しており、平均睡眠時間が国際的にみて短い方であると言われる我が国の状況と整合性がある結果になっている。

表 3-12 睡眠時間

	男性	女性
長い	6%	6%
ちょうど良い	58%	58%
短い	34%	36%
該当しない	1%	1%

通勤・通学時間についても、該当する人の割合に違いがあるものの、該当する人の中の男女の違いはあまりないと思われる。なお、「短い」という回答が「長い」という回答を上回っている。この「短い」という評価は、満足度との関係から考えてむしろ肯定的なものであると考えられる。

表 3-13 通勤・通学時間

	男性	女性
長い	13%	8%
ちょうど良い	39%	31%
短い	16%	11%
該当しない	33%	49%

家事時間には、大きな男女差が発生している。男性では、「該当しない」という回答が4割近くに達している。また、「長い」という回答が非常に少ない。一方、女性では過半数の人が「ちょうど良い」と回答しているが、「短い」という回答の方割合も25%に及んでいる。

表 3-14 家事時間

	男性	女性
長い	3%	10%
ちょうど良い	31%	56%
短い	27%	25%
該当しない	39%	9%

看護・介護・育児時間については、「該当しない」という回答が7割を超えているものの、該当するという回答の中では、「長い」回答する人の割合は、女性が男性よりかなり多い。

表 3-15 看護・介護・育児時間

	男性	女性
長い	2%	6%
ちょうど良い	11%	14%
短い	11%	7%
該当しない	76%	73%

その他自由時間では男女差はほとんど見当たらないが、男女とも、3割以上の人が「短い」と評価している。

表 3-16 その他自由時間

	男性	女性
長い	12%	12%
ちょうど良い	51%	52%
短い	31%	33%
該当しない	6%	5%

4. 経済的理由で行うことができないこと

個人の経済状態を所得以外の側面から把握するため、経済的理由で行うことができないと感じることについて聞いたところ、年一回の外泊旅行、及び予期せず急に5万円支払うことについては、4割以上の方が「経済的理由で行うことができないと感じる」と回答している。お肉、お魚を一日おきに食べることが「経済的理由で行うことができないと感じる」と回答した人も約16%存在する。寒いときに十分な暖をとることができないと感じる人も約20%存在する。

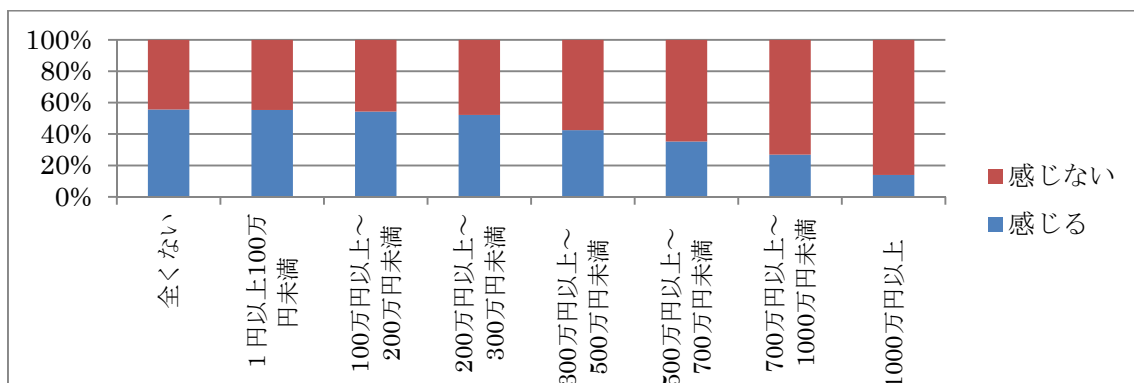
表 4-1 経済的理由で行うことができないと感じること

	感じる	感じない
年1回、1泊以上の国内旅行もしくは海外旅行をすること (注：親族などの家への宿泊を除く)	41.7	58.3
お肉、お魚を一日おきにたべること (注：菜食主義の方は同等のもの)	15.9	84.1
予期せず、急に必要になった5万円の料金を支払うこと	48.6	51.4
友達や家族に最低月に1回、食事か飲み物をご馳走すること	33.1	66.9
寒いときに十分な暖を取ること	19.8	80.2

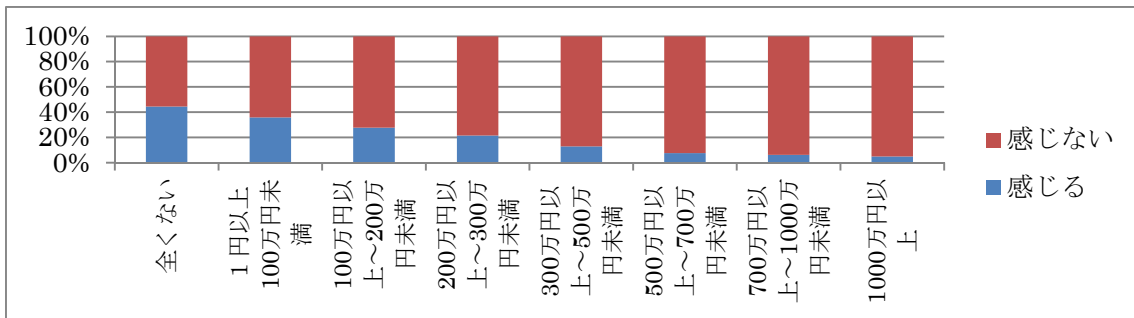
経済的に出来ないと感じることと、世帯年収の関係をみると、世帯年収が低い層で、明らかに困難と回答する人の割合が高まる。ただ、世帯年収が高い層でも、困難と回答する人がすべてのカテゴリーで存在する。

図 4-1 世帯年収別、経済的理由で行うことができないと感じること

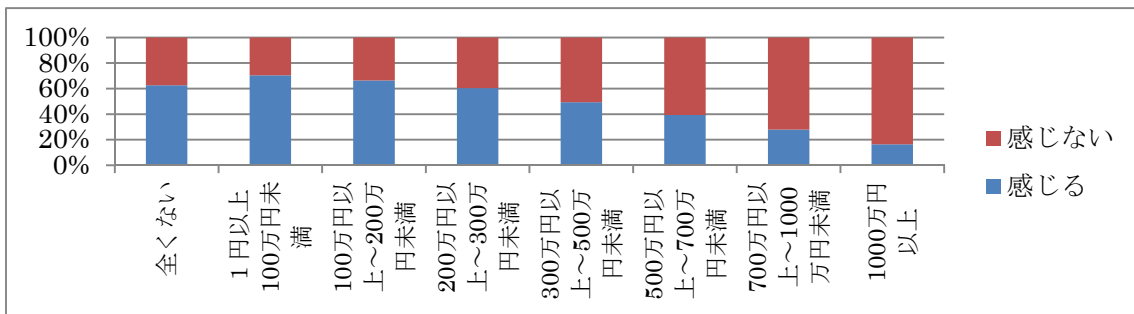
(1) 年1回、1泊以上の旅行を経済的理由で行うことができない回答割合



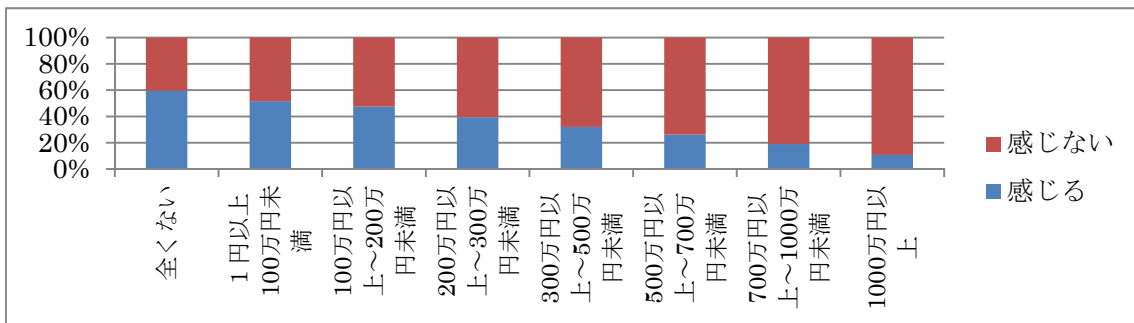
(2) お肉、お魚を一日おきに食べるができない回答割合



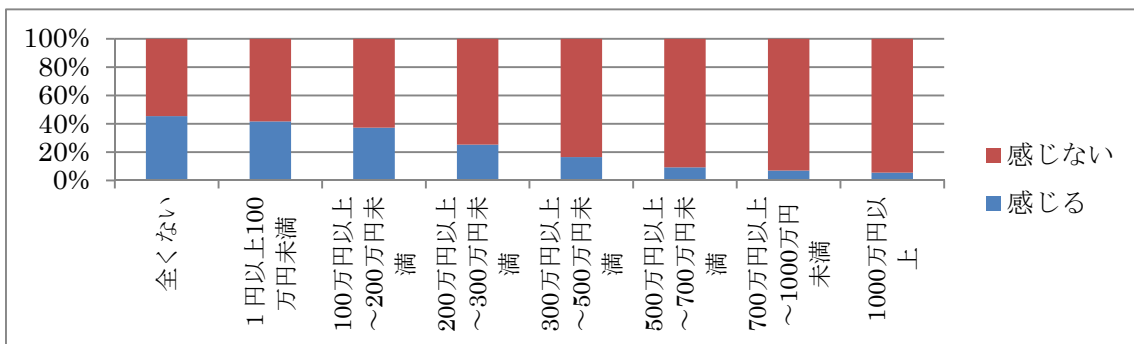
(3) 予期せず、急に必要になった5万円の料金を支払うことができない回答割合



(4) 友達や家族に最低月に1回、食事か飲み物をご馳走することができない回答割合



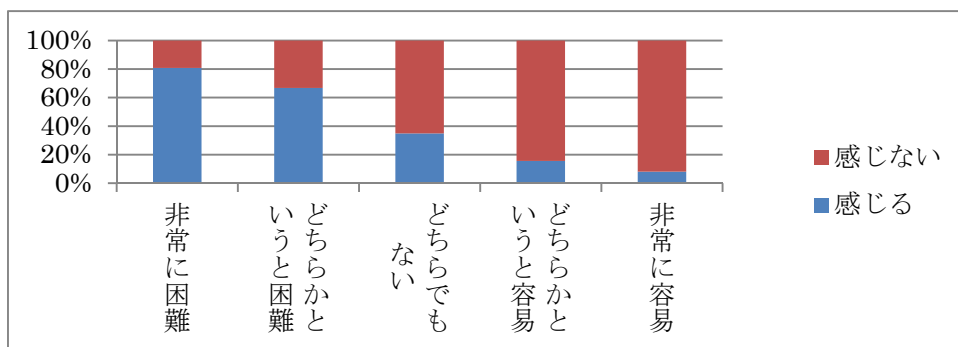
(5) 寒いときに十分な暖を取るができない回答割合



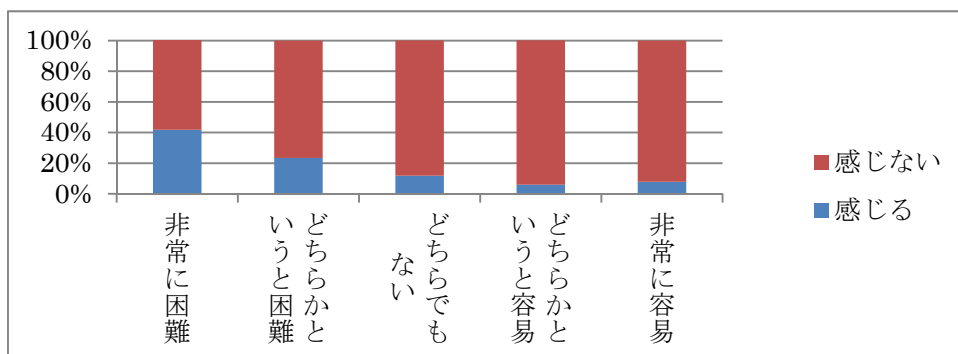
本人自身が評価する自身の経済的な困難さを測るため、別途必要不可欠な生活費をやりくりすることがどの程度困難かを本調査で聞いているが、その質問への回答との関係を見ると、生活費のやりくりが非常に困難と回答した人の約8割が、年1回の旅行や5万円の支出が出来ないと感じると回答しているなど、これらの主観的な質問への回答の間には明確な一貫性があることが分かる。また、生活費のやりくりが非常に困難と回答した人の方が、世帯年収が全くないと回答した人より、経済的理由で行うことができないことへの回答も厳しい。

図 4-2 生活費のやりくりの困難別、経済的理由でできないと感じること

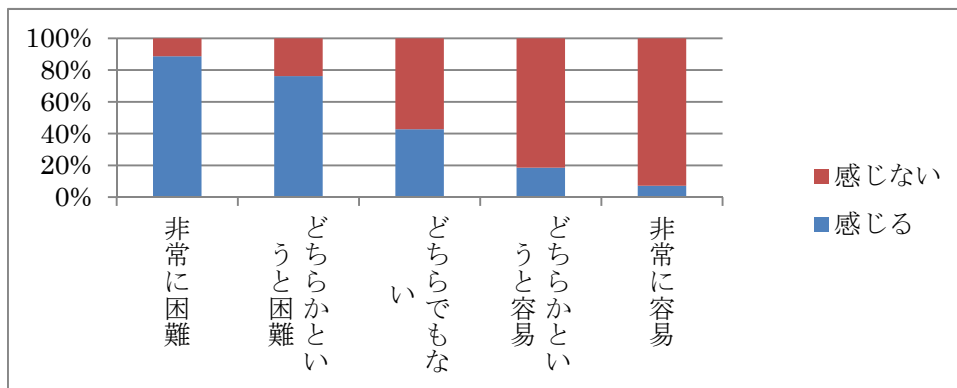
(1) 年1回、1泊以上の旅行を経済的理由で行うことができない回答割合



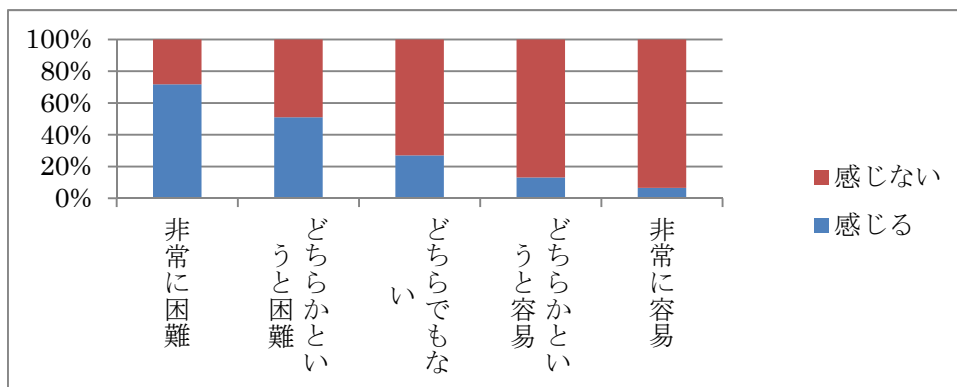
(2) お肉、お魚を一日おきに食べる事ができない回答割合



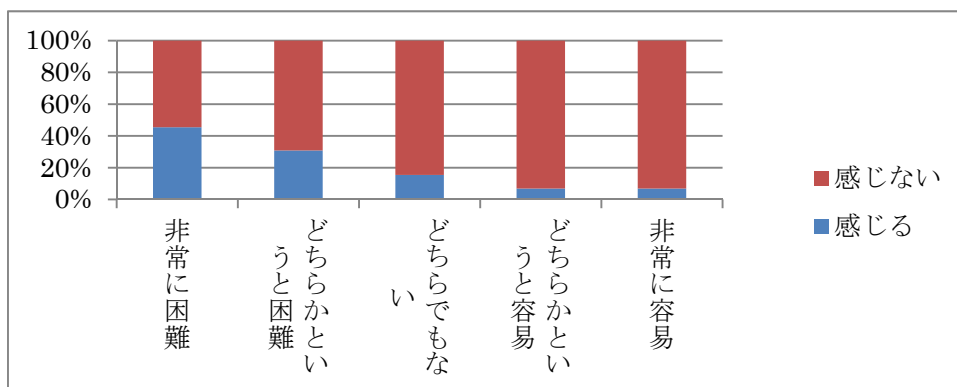
(3) 予期せず、急に必要になった5万円の料金を支払うことができない回答割合



(4) 友達や家族に最低月に1回、食事か飲み物をご馳走することができない回答割合



(5) 寒いときに十分な暖を取るができない回答割合



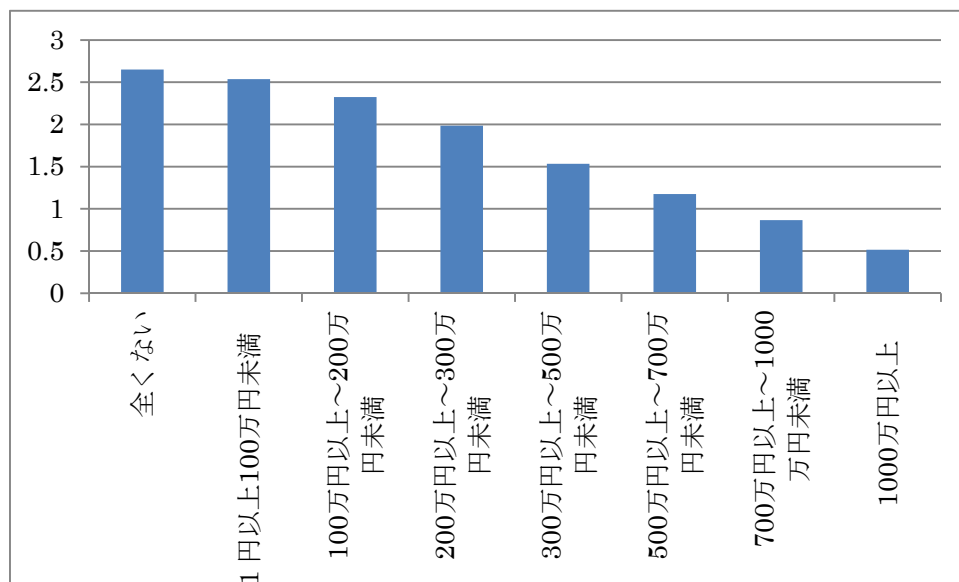
経済的理由でできないことの回答者ごとの選択数をみると、3割の人が、3つ以上、できないと感じると回答している。

表 4-2 経済的な理由でできないと感じることの数（最小0、最大5）

出来ないと感じることの数	回答者数	比率
0	2,446	38%
1	1,017	16%
2	1,016	16%
3	935	15%
4	533	8%
5	422	7%
合計	6,369	100%

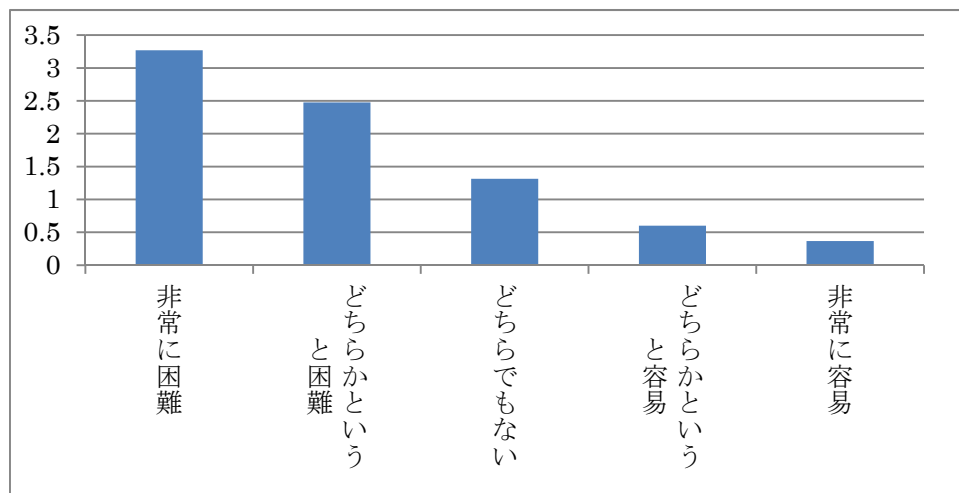
世帯年収別にできないと感じることの数をみると、世帯年収が低いとできないことが増加し、200万を切ると、平均して二つ以上できないと感じることがあるという結果になっている。

図 4-3 世帯年収別のできないことの数



必要不可欠な生活費をやりくりする困難度別にできないと感じることの数をみると、非常に困難と回答した人は平均で3つ以上のことができないと感じていることが分かる。

図 4-4 生活費のやりくり困難度別、できないと感じることの数



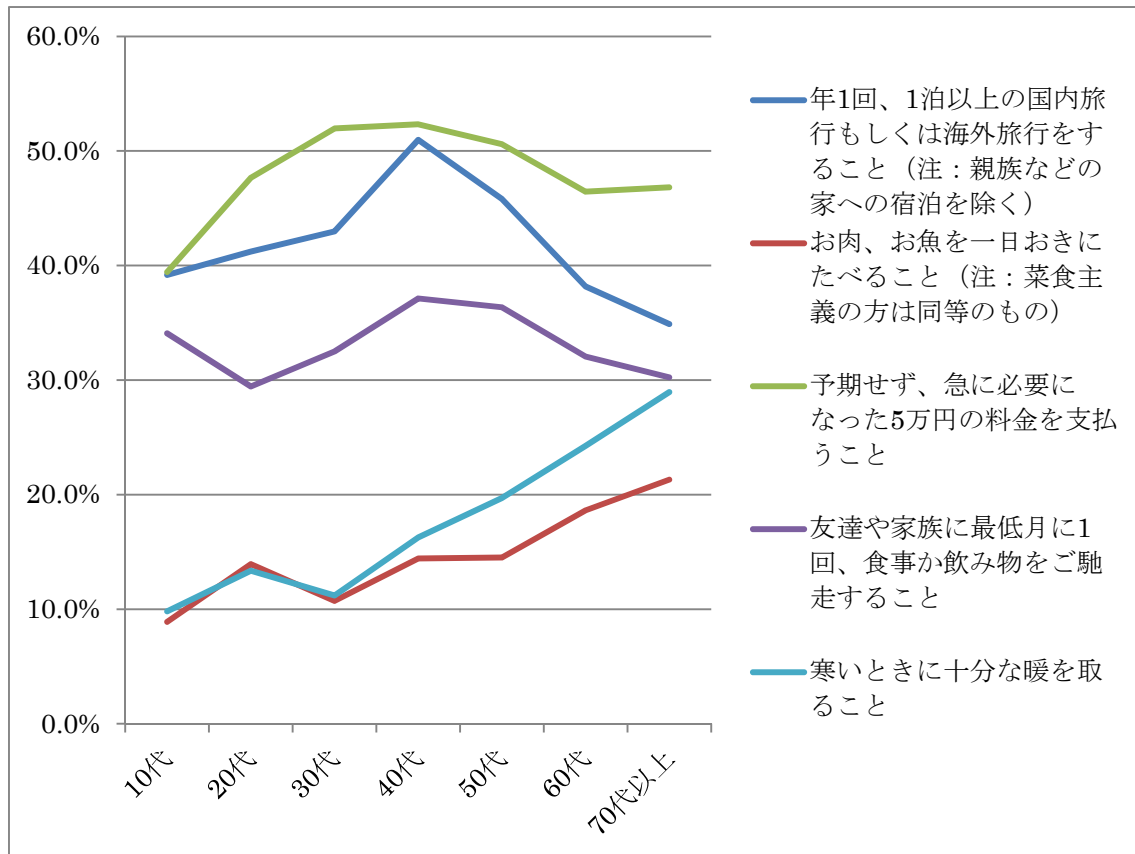
経済的理由でできないこと別に、現在の幸福感を見ると、できないと感じる人と感じない人で幸福感にも大きな差がでている。特に、お肉、お魚を一日おきに食べることができないと感じると回答する人、寒いときに十分な暖を取ることができないと感じる人の幸福感は低い。

表 4-3 経済的理由でできないと感じること別の現在の幸福感

	感じる	感じない
年1回、1泊以上の国内旅行もしくは海外旅行をすること(注:親族などの家への宿泊を除く)	6.1	7.0
お肉、お魚を一日おきにたべること(注:菜食主義の方は同等のもの)	5.6	6.8
予期せず、急に必要になった5万円の料金を支払うこと	6.1	7.1
友達や家族に最低月に1回、食事か飲み物をご馳走すること	5.9	7.0
寒いときに十分な暖を取ること	5.7	6.9

年齢別に、経済的理由でできないと感じる割合をみると、項目により、形状に違いがあり、世帯の年収以外に、本人の年収、ライフスタイル、経済観念の違いが反映していると考えられる。

図 4-5 年齢別、経済的理由でできないと感じる割合



なお、比較のため、年齢別の世帯年収と本人年収をみると、10代では、本人収入がほとんどないものの、世帯年収が高いことが分かる。

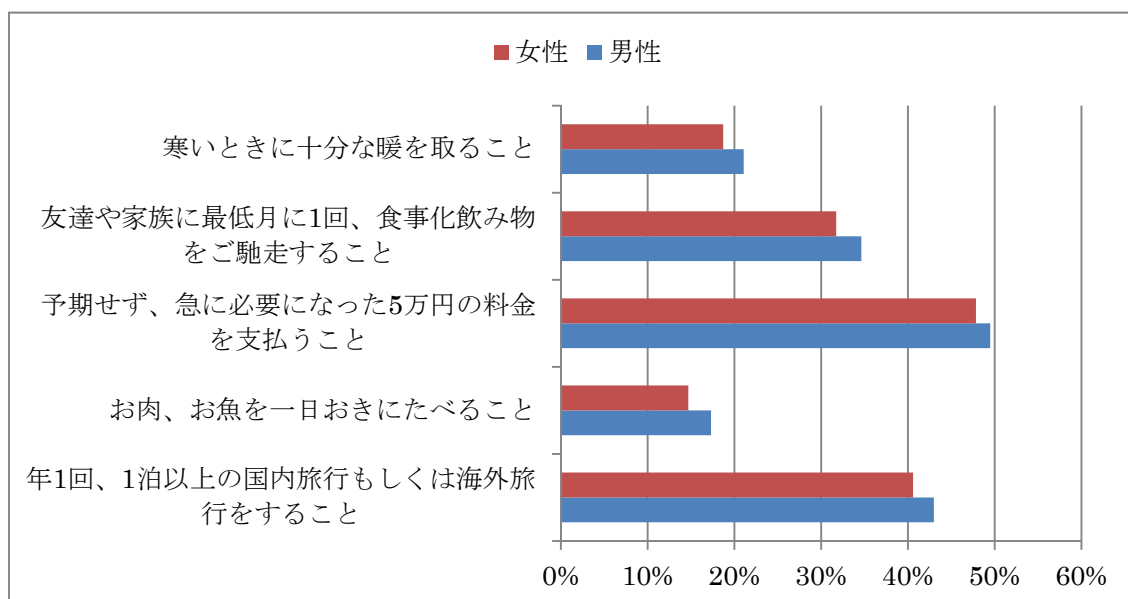
図 4-6 年齢別、世帯年収、本人年収（縦軸は収入の指数*）



*）年収指数は、全くない：0、1円以上100万円未満：1、100万円以上200万円未満：2、200万円以上300万円未満：3、300万円以上500万円未満：4、500万円以上700万円未満：5、700万円以上1000万円未満：6、1000万円以上：7として回答を指数化したもの。

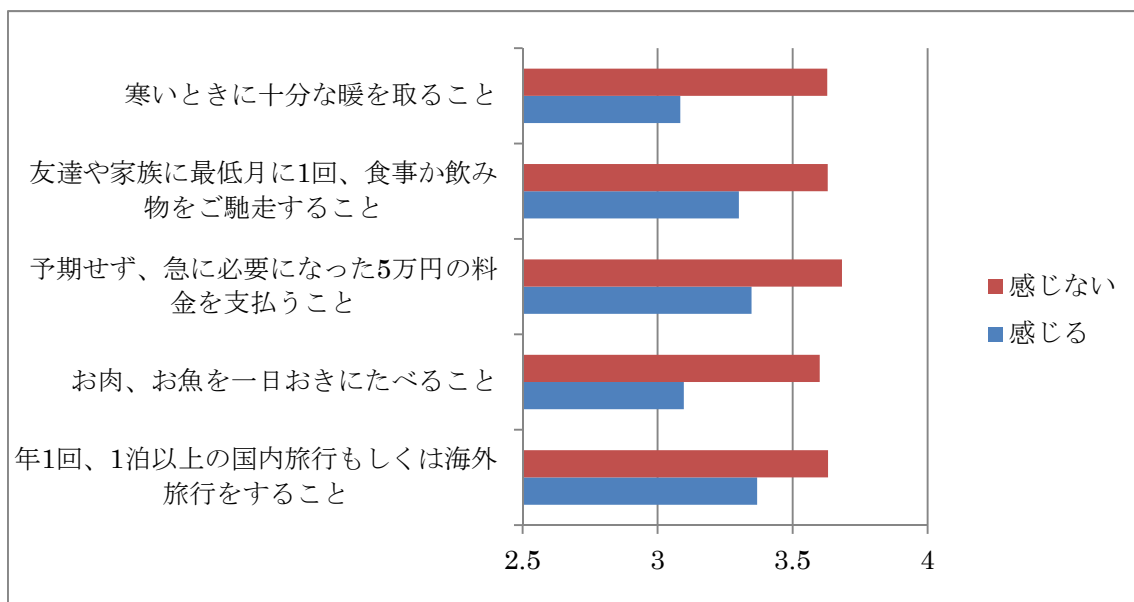
性別にみると、男性の方が、全ての項目で困難と感じている割合が高い。

図 4-7 性別の困難と感じている割合



物質的剥奪は、健康にも影響することが懸念されるところ、経済的理由でできないと感じることと自身の健康状態の評価の関係を見るために、別の設問で調査した自身の健康状態の評価を「健康ではない」を1、「どちらかと言えば健康ではない」を2、「どちらとも言えない」を3、「どちらかという健康である」を4、「健康である」を5として指数化し、できないと感じる、感じない別の得点をグラフ化すると（図 4-8）、明確な相関関係が見て取れる。経済的理由でできないと感じる場合と感じない場合で健康状態の評価の分布に違いがでるか適合度検定を行ったところ、全ての項目で、1%水準で有意であった。

図 4-8 自身の健康の評価と経済的理由でできないと感じることの関係
（グラフが高いとより健康と評価している。最小1、最大5）



参考文献

幸福度研究ユニット(2012)「第1回生活の質に関する調査(検討用資料)」

幸福度研究ユニット(2012)「第1回生活の質に関する調査結果(インターネット調査)(検討用資料)」